

## 第2回国際古代西アジア考古学会議コペンハーゲン大会

Near Eastern Archaeology in the Beginning of the 3rd Millennium AD  
2nd International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East  
Copenhagen, May 22nd-26th 2000

紺谷 亮一

コペンハーゲンの5月。日差しは日に日に強くなるにもかかわらず、吹く風は北海の冷たさを含んでいるのであろうか、まだ寒さを感じる。また夜の暗闇も漆黒ではなく、やや明るい。コペンハーゲンの人々は非常に気さくである。そんなコペンハーゲンの国際学会に私が参加するきっかけになったのは本会会員常木晃氏から誘いをいただいたからである。

開会行事が行われたのはコペンハーゲン大学大講堂である。講堂内はまるで教会堂のようで四方は壁画によってかざられており、とても荘厳な感じである。日本の大学ではとても考えられない建造物である。不思議なことにデンマークのような小国においてさえ文化とは威嚇であるという表現を実感することができた。



国際古代西アジア考古学会議は今回で2回目で2年に一度開催されている。当会議はアッシリア学会から分離独立したものである。次回は2002年にパリで行われる予定である。現在、どの世界的な学会でも総合化よりも個別化が進んでいるようである。ちなみに後援企業の一つはSAS(スカンジナビアン航空)である。

日本からの参加者は川床睦夫氏(中近東文化センター)、大村幸弘氏(中近東文化センター)、常木晃氏(筑波大学)、渡辺千香子氏(大阪学院大学短期大学)、西山伸一氏(ロンドン大学)そして私である。大会は一般研究発表、ワークショップに別れており、ここではそのすべてを網羅することはできない。一年後に報告集が出版される予定なので詳しくは後日、討論することが可能であろう。そこで詳細に



については次号で触れさせていただく。そこで本号では簡単な紹介にさせていただくことをご了承願いたい。

以下、設定されたテーマを記しておく。

全体テーマは「前3千年紀初頭の中近東考古学」である。各セッションでのテーマとしては「テル」、「イメージ」、「イスラム考古学」、「環境考古学」、「発掘報告」、「アラビア半島」、この他に多くのワークショップも開催され、その中には「文書、考古学、歴史的復元」、「層位」、「地域的反映」、「マジックプラクティス」、「歴史の中の軍隊」、「経済と商売」、「ピラド アル・シャムとジャジラにおけるイスラム考古学の地政学」、「気候、気象と歴史オーガナイズ」、「編年」、「オロンテス川」、「中期青銅器時代および後期青銅器時代の土器」であった。各人の発表時間は約20分であった。

紺谷亮一

筑波大学歴史・人類学系文部科学技官

Ryoichi KONTANI

Institute of History and Anthropology,

University of Tsukuba

